

今月の一言

キーワード：指揮者

音譜は建築でいえば設計図のようなものだ。優れた作曲家は、具体的な建物がどんな天候の中で、どんな場所に建ち、どういう人たちが、何を目的にその建物を使うのか。そういうところまで考えて、楽譜と言う設計図に自分の音のイメージを表現している。

指揮者はその設計図を見て、作曲家のつくり上げた建築物を想像し、それを建てるためにどういう職人（演奏者）と、どういう材料（音）が必要で、どの職人と職人がどういうふうにかを合わせれば、優れた建築物が建てられるかを考える

考えてみれば、不思議なことだ。見知らぬ土地で、しかも二百年も三百年も前につくられた作品が、同じ譜面を手にしさえすれば、現代のドイツでも日本でも同じ演奏ができるのだから。指揮者は、音譜という記号を使っていたん“冷凍保存”された音楽を生き生きと今の時代に再現しようと、全身全霊で想像を巡らせる。

作曲家はその音の風景に何を求めたのか。最も単純な和音に人間の生命力を見出したのか。あるいは異なる調性の重なりで現代社会の混沌を表そうとしたのか。

そこから推理ゲームのように、その作曲家特有の感覚とイメージから音楽に込めたメッセージを探り当てていくのである。

指揮者に求められるのは、音楽的な求心力と同時に人間的な魅力ということになる。少なくとも人間嫌いには、できない仕事である。

著書：棒を振る人生（指揮者は時間を彫刻する） 著者：佐渡 裕より

生活する人、使用する人、集う人の姿を想像

設計者の意図を探る

2015年3月25日

さいのう とおる

追伸：暖かくなったり、寒くなったり体調管理に注意して下さい。春はそこまで来ています！